

populations near Sekigahara were referred to *T. elatum*, and those near Toyohashi were similar to *T. longependiculatum*. These two extreme forms, however, were united with each other by many intermediate forms. These two "species" could not be regarded as two distinct taxa.

□Cronquist, A.: **An integrated system of classification of flowering plants.**

1261 pp. 1981. Columbia Univ. Press. ¥40,300. 前に出した *The evolution and classification of flowering plants* (1968) を大体踏襲しているが変った点も多々ある。その一つは被子植物を他の分類群と同じ格にして Division Magnoliophyta Cronquist, Takhtajan et Zimmermann 1966, 双子葉類及び単子葉類を二つの class 即ち Magnoliopsida 及び Liliopsida とし、以下順々に亜綱、目、科まできちんと体系を整えたことである。それでモクレン亜綱は64族、318科165,000種を含み、ユリ亜綱は19族、65科50,000種ということになった。第二は前著では目までが主で、科は検索表で表わされるに過ぎなかったが、本書では寧ろ科を重点に挙げ、各科毎に細かい記載を与え、代表的な属を美しい図で示すと共に、科の記載は中々細かく、たとえばモクレン綱の花のところで, floral parts, when of definite number, typically borne in sets of 5, less often 4, seldom 3 or other numbers とあって中々穿っている。しかも化学成分と細胞器官に特に注目を払い、前者を記述の劈頭に揚げるなど意表に出る処もある。とにかく科が最も重点と考えられた点は著しく変った処である。それはそれでわかるが、子葉がほとんど論ぜられない点は附に落ちない処であるし、各形態の異相はよく拾ってあるが、その原始型なり、祖型がいずれであったか、現在では論じにくい点はあるにしても、その若干は述べられて然るべきではないかと残念に思う。第三に各 Division からはじめて各目に至るまで多数の文献が挙げられているのは有難い。殊にソ連の文献が纏っているのはなお更である。その内容を見ると分類的、フロラのものを捨てて形態学的のものに重点を置いているように見える。分類的のものは論議がやや平板なおそれはあってもやはり欠かしてほしくなかったと思われる。第四にこれは私の感じなのだが、ユリ綱で Ord. Najadales Nakai, Ord. Arecales Nakai, Ord. Eriocaulales Nakai など1930年の記述が多く挙げられたのは、モクレン亜門で Fam. Mitrastemonaceae Makino が採用されたのと合わせて嬉しかったことである。いずれにせよ、この本はこれからの科の位置を設定するに際して無視できない重要な拠点の一つであるに相違ないのである。

(前川文夫)